延五秘抄 中

古今抄十

内閣文庫
和書
類 二五八六一
冊 三
函 二〇〇
架 四

内閣文庫
番號 和 25861
冊數 3 (2)
函號 200 16

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草文庫

やまとうたの人のあらそひてよみ侍しの
こゝろ系ゝなれはまけの
心一段和哥の大意也

和い此歌乃名也ゝ此歌の風也山國をやまとゝ
名付ゝ名義い伊勢井諸伊井摩國ゝ山海まゝ
人倫ゝ生ゝ物ゝ此歌ゝ後世ゝ此歌ゝ水土
未軟しゝゝ人ゝ山ゝ行て山成ゝ事
事ゝ故ゝ麓の迹ゝ行ゝ名字ゝ
心の迹ゝ以ゝ人ゝ
ひゝきゝ人ゝ山ゝ書

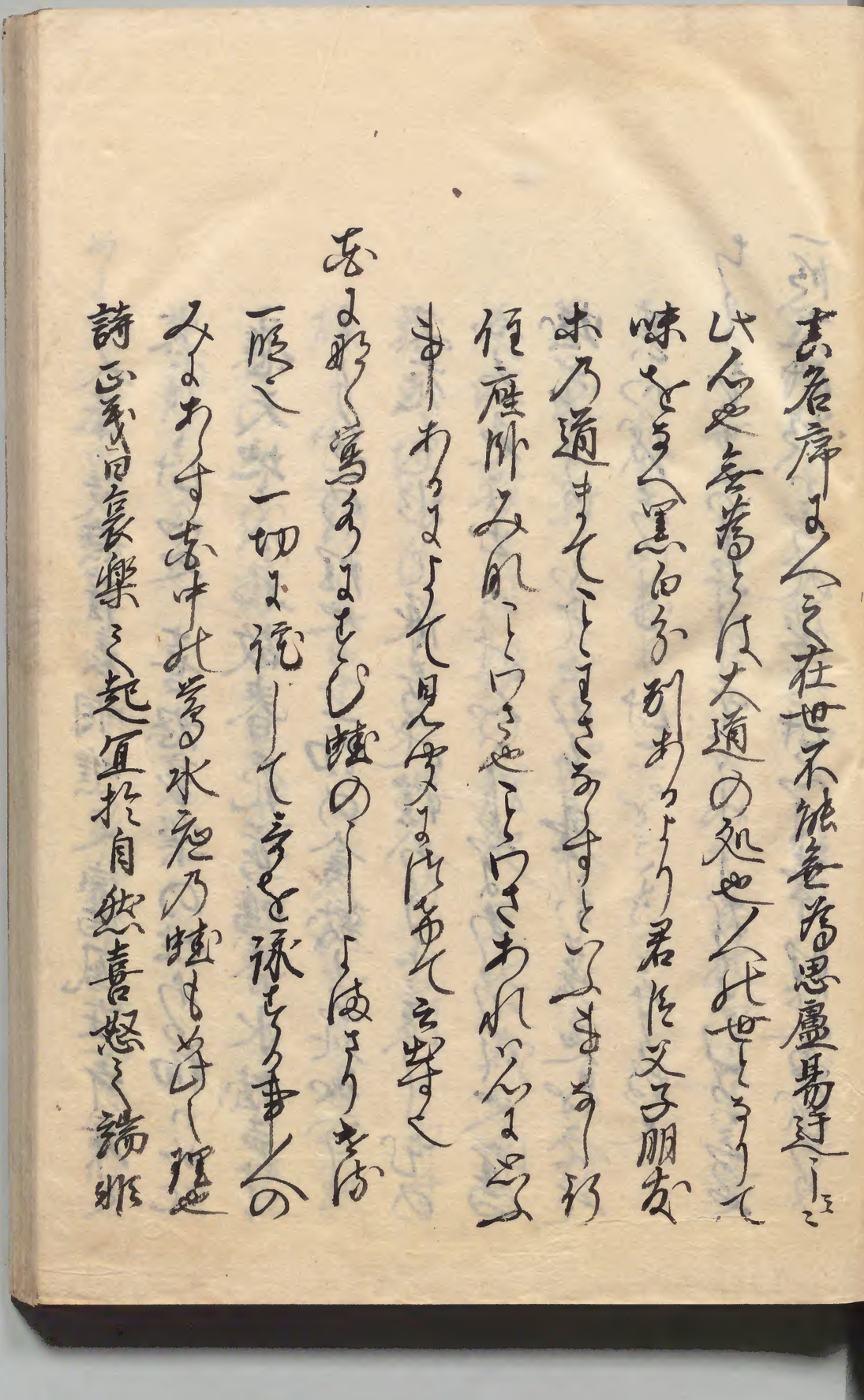
心とそ申さんも 心道の義通とも 心至誠の
義も志乃字〳〵こそ一切成就の根元とす
所い志のゆく所をもつて成とも云ふ成就
也 又云やまと云ふことは大よ和く義あり 大ふと
対する大よいあり すなわち大也 其故天竺
の梵字漢字よりかり漢字共に成和字をも
はつる也 和字の字をもて陀羅尼のい漢字共
詩とも云ふ也 和字い今四十七字をさだめ
其心成の名をもつて 心道の奥意也
又云自古及今し和を大と称をもつて名とす

二神陰陽和を始りて乾坤一切万物乃而
和也 和字は也 やまと共 心道乃義と
中ごと 大和の義と通をへ 并用も
蓋流伝也

人のいとなみして 詩に云りこゝ 安心為志こゝ
んよあるとこいつ動也 世乱よ 事は論こゝうまよ
こゝも 世事こゝ我身とお対をも世事のまを
んにこゝすなわちいこゝい世事よりあり理也
そこゝ寒温をもようこゝもこゝんこゝ

こゝ有ると云にいたりてなり
又云天地陰陽の一氣起て萌芽しい成
天神七代以前を云又一切万物の根元
ゝ成れ来りて人のこゝろを云れすとて
又根本元初の一念よりも出来し性
性元始より今日まで流転し来る
是人の心也しかれども此心物に託
してうごく也

世中にわれ人へ一ひとりいでしせる也一説



書名序より人こゝ在世不能無者思慮易迷こゝ
じん也善者こゝ大道の処也人此世こゝ
味をこゝ黒白分別ありより君臣父子朋友
夫乃道まてこゝ
任庭所みれこゝ
まわりよりて見人の性善云説
安よ形こゝ写ゝ
一時こゝ一切よ流
みよりて安中此
詩正義曰哀樂こゝ起宜於自然喜怒こゝ端

由人事故燕雀表咽噍之鶯風在弄舞之
容ゝしけんも　喜怒哀樂の性ある物いかに此
應天地ゝ氣故春花鶯鳴春水猿声する
もゝ花の開も　一切の含識も此如〳〵
又花も水も涙ありと云へ〳〵むの
んを色ゝ出ゝけんもあるべし鶯
蛙をゝゝゝて云出て事い出色をえて
其心成ゝるまゝ　此二をさきとする故
ゝゝをもつ事ゝて　ゝゝなくもしらいゝを
一所ゝ此所いゝ光徳も　けんゝ事明也あり

天地をゝゝこゝゝといつる　能用ゝ　なるゝ
ゝゝせきゝゝゝとよみて面ゝゝゝ事
ゝゝい事の義も
天い地ゝ對ゝてあり地い天ゝよりてあり人民
天地ゝ對ゝ同根の理也　天地い我ゝ用き
我天地をいゝくゝ天地人の三い別ゝあす
故ゝゝゝ動くゝ有すゝゝ天地をゝこゝ也
一首の句成詠ゝも天地を胸中ゝゝこゝ也
是理ゝ義也
ゝゝみゝ人界外をもゝ　界外ゝい陰陽のたま

こゝの也地てんのうまもり給ふ神いんぢうを
を保すにんぢ感動するもろ〳〵邪神を
わるれと思ふ也此道に入て邪をすて正に
仰一にとなつてとすの所をさゝへて冥神
を表と思ふとゝも也是理の後也
天照皇神伊勢正宗陳本の擁護あるべき
を感應あるべきなり　春神日神ノ紀理也
又弘神もんのかみ出へうす畢竟一心を
上成をゝへうす伊勢宗冥神の人を授
すゝまわるゝ時　去も也大変恐

いつくしむのをみうなりゝまことゝゝて平等
やゝ法ゝを云まゝをあり
れゝをんれの中をもゝ一一此理勿論也その
たゝ一ゝて勝手
たけきものゝ也ゝいをもゝ一一
かゝゝきれをゝいうをとうれ也の一首を
屋をゝをゝうゝとけ理也是事也
をものゝ也ゝ人芸草と等するものゝかを
をんれ雑情すゝ成つゝりわゝい胸中の
ものゝ也をやゝゝうゝ也　笑喜怒力やゝい

如類みないのまれく極なり

以上二十九條

此外二十九條あつらひけ——いてきたり 歟

元禄開闢より二部

其外未詳

あまたれたりしたてまつる——天浮橋尾の

遺すの処といるなり

此古説に法きて玩こあり二示家に曰く注

明らく曰く巨細と注てくらいたむ

為也世の内侍よりあるくいろいろこれなり

つ来て云義注に山桜あるまて多成みつる

の三の時代おもすとつ伝あり此年年

面盤の三の伝説 此曰く義年中

あるしし人此時面盤の年なり

ともとなるなるこの三なり

又云山桜の奇い法槙云槙と云伝あり

但面盤三の法槙云の家にて面盤の三の

徳古今でんも古注いに云任帰筆に此年

実なりや

但二示家のまへ曰く別て作るべ

公但此書如とてもまことうて書こすす
ことなり
若家婦明鏡物ぶ要こく古須也公務ゑ蓋盛
こと此分ゑ男女なるべし此須民古須と号
ともあり是よりさきいにしへ今須なるも
しなりやこと又小須ともいへり
め神とうこと一二神ともみまし神ゑ
侯本 憲武遏可義サ男写陽神光唱 憲武遏義サ写
ちうわまことせよ法ゑ一段うう

ちうわれこと二神の神ゑあることと大道
りてこのゑ及こられいかて伊姫乃ゑ
とのせこと
さて伊姫のうわとうやと後世のうか
ちうせ玉此こまりせあるたまこと
たまやこまこそあらもきこめひこれ
天こしていとうひて下照姫のゑを出てんを
うれまとこれ二神乃ゑありといふこと
大道みして玉いかつちかて神代の
まなれこそて下照の

ゝうと申
さて皆ひめ――天照大神の皇孫を作り
出雲のことをせんとして天稚彦を使はして
下界に下照姫と契をなして天
より降りすみ給ひ
ぬ其後下照姫と妹相高ヒコ子と兄弟
ありとうみこれ喪の時天よりのりてれ
ゝを味相――のもとをはらうを天
稚――下照――味相――みな素戔嗚ノ
御孫大己貴神なる神なり

をゝ子ふゝうはらりて――ゝれゝら岳若に
うはりてかゝや岳若ゝとゝるゝ
陰陽若い陰岳い陽みゝうゝれゝれ
えひとゝ神 夷豊 日神のてれゝ對れい
此家いえひすとゝうゝ天上ゝてのゝ
とゝ伊祇神――ゝれい夷豊とゝつけゝう
ひみゝうとゝ
ゝゝてゝいとゝ――のゝゝとゝはゝゝす――
下照姫のゝゝも尚れみゝゝも立定ゝの
ゝゝはゝゝとゝ

あるかれのたちもていい――地祇神の元代
ちゝ城いの母八重しきつの乃ゝ母ゝ
ちゝやつの神代よりいし――一をゝ――いとみ名
をゝかみして神代よりみ字の所ゝ
ゝ古注よみてゝうといふことゝ裏伝よ
いわすほい後よ書陵部
人の世とうりて――人此世とうりて書て
すさをのみことといふ名うた素戔嗚尊の
此一字乃孫をもつて人の世乃ゝ

をゝかれよりゝ伝ゝ人此世の乃
は集一部をゝ――ゝ八重ゝつの乃ゝり
さたよと此一字此うゝあるゝ伝あり
但ふ合ゝ
をさをのみことい――一世三男ゝをさをとい
ゝみてゝゝ男をゝ――世を
てゝすゝ乃ゝ系図ゝ世を後よすゝ
又云素戔嗚尊ゝ天照内神ゝ
ゝて後素戔嗚ノ日神ノ世ゝ
ゝ乃ゝ

ゆとりをみおろんとして　けをとたつをて後出
雲国にて稲田姫と住給ひんとて文化
ゆうしおろ　けをて結髪ありし時を
いろり
時にて乃ち八さの　けの時陽そのうつと神須佐
しての孫を出雲国とい　けをのいつしられ
よ号すると　いたも雲北にて　時にそれ而
ゆとおろよ　おなせるやうを　けをいい元来　けを
をてを　ひまを　ひまを　ひまを出もと号ゆう
素戔嗚尊のけれ　住給ひすの時もみ　け

陽そのうつ　ひかり　手人は感
て陽雲のうつ　ゆうしあるうつの
八雲ゆいつと　屋へ　けをこ　ひたくうう　ひをへ
やくとゆつ出　ひをへ　うきと　此而のさまを
大やゆいを　手を　宝剣を　郭公
さ月を　ひ
けまこめい稲田姫　ひをつ人　ひをつ　ひを純
受のつを　屋へ　ひたい　ひ
宝剣をり　ひへ　ひきを　ひをの
ゆうゆいを　ひをそうを　ひを

やうなる古事ありて
八色の雲は八識なるべきなり行也
八識五行脇能しうる世と眞隆すう
事也おろち國は蛇の人を授ける事有也
人を伐ることうしとみることをつをなる
ひて人民やとれまとえることも
八識五行おくるなるは一事をもみるべき
八雲とつの字は清濁の別あり いつも
やくもうきをいはみてよしとの字きこ
をいにうりてよしとをもういよりて天地

なり濁は地となる理也 素戔嗚尊は地神也
とつとも日神の字なれは天地うけうる神
まて陰陽也 此は配しなる故なり
日神と和しなりて後の事なれは
ひの字なるべし 此一字を用ひて世界
此字に月神の切字ありうること
此字は出て神代の字なるべ
き歟
日本紀の流は此字は字数をそうる字歟
句数 意義 始終数 是文字数とは二十

一字にして未代まで此根元となる所を自然の
神代の事をもて自分の意を以て上古の事といへども
始終明らかなる事を始として不義を不斷
後の義也
かくて万元とは一つにして一切
ものとの乃みこの世一字にて万元
多指さしまなる事也
同じくとは天地
鳥とはやむしは
雲霧

おもれひ無しとは
雲とは霧とは風
人のんなさまなる物也
とは一切ちりとは
千里乃行も足下より
言山も微塵より
ちりは六塵の義也一氣をうけて人身
んあり二神より人世にうまれて
ひろまりもろんも完物より
部分したの事也ちりやこの乃世の事

仲門は初めなり　仁徳の代乃河内の
国のたまひなる徳みなり
おなじきは仲門の　仁徳の内まもるきぶ
鳥の名は仲門にて門をまもるなり
なりなり
東京とは天皇ひとゆつりて　應神天皇宇治のほう
にこゝにみこまを世をゆつりなりに仁徳い
兄にて仲哀天皇の御子なり　なり三
年まで位をつぎなり世をまもる
うせて民のうれうに宇治みこ神武

とうてうをおもひ　子房仁徳牧昂位なり
時は王位といふこゝろ　兼人仁徳をいさめ
つゝ　王仁は日本の文道の師乃ぬし
にまた　應神仲哀時書記せり　仁徳の
仲師なりしきた
莫忘の人　年をとりていさん中事猶豫の
此事はきうひとつ　此事は年ありしきう
しの世は月はきる　此事は年ありしきう
は数なり　高山乃河も
毎年思て　いりて　年をていそのの

いかゝ

この花を　山花と　木の花とて　二流あり　美流
なり　明経博士　山流あり　今
山時　今云ふ　ふつう　一　裏書　おかたの　仙のまゝ　流
あつまる　処なり　仁徳　美民　あつまる　処を
云ふ　等　きゝなれ　なつかしき　山花と
まつ　大原　に云　世と　白　山時　乃　さま　多
云ふ　仁徳　の　雖　こうまする　人
又　いまだ　色　や　一　そ　云　いまだ　花　自　れ　ず
理　宇治　文　さ　ま　仁徳　の　世

云ふ　つき　理　花　ゝ　て　仁徳　世　た
ら　ず　く　民　の　人　貴　ま　を　ゆ　む　と　ら　み
ず　と

あさ　山　花　ゝ　て　一　ゝ　み　て　ゝ　ん　て　と　ら　し
かつ　き　の　ち　き　み　を　一　法　奥　こ　国　司　あ　り　き　れ
れ　ず　ゝ　や　ゝ　め　ゆ　ゝ　か　ま　れ　て　ま　ら　き　み　を　く
ま　ま　ゝ　あ　よ　雲　可　と　ら　ゝ　ま　り　な　ま
王　此　す　ま　ま　ゝ　ま　る　時　ら　れ　花　め　ゝ　ま　を　ら
桃　子　に　水　を　入　て　ま　ま　ん　の　ひ　さ　と　ゝ　ま　て

はうとうみてるさめりなる　百姓のし年貢
わさうゆうけさへ　山うをとんりなる　信さん
みゆりうけるる山此信もりつるんなる深水
わさう山此山井に深き水なるうみるまいあさ
くみゆりやうなりそのとく国司此んし云
を此ろそうにい里に行とみく新さをき
さうひ此うひうれいり此まさとなる此也
なくうりうんな
はうを新禄冷泉家用　年こいこに書入うり
貞應二条家　年こ八月ここあさう山此うをまうんに

歌波津のうに六義の処をみてうり此うり
いまさうあれを書入也
二条家のんに山二うをはいつまとあいさす
世のへあまれくうをあさう山此さうを
書入るりうをなる歌波津のうに六義を出せり
とこうを見むまし　年を理こ山うを新禄年
月しさしめうこうを　為相卿　書加とこと
或定家卿　出入れこを入れ波業を俗名り云
ちのゆとうこいい　定乃又母と内こうれり年
うれいやうそとと書り

昔はよろこひにあへるよし此歌を書てあはせ
ゝるにみ給徳あるうたをもて此二首をのせり
雖彼詩云ハ仁徳猶未帰往天下雖然なし
時此うたにて天名をたすけしるも大徳なれハ
是をのせり
何さり此歌を此二首にて人をかんする徳ある
此首徳の事うたあるなり
此首男女の派と父母にあつる理あり
又云父母乃子成思心にお有て　又此子をお
身をは尤深しき子み方をもて家を保き

事を思ふ也母は子を思ふ事思ふ深し理あり時
にあたりて思ふ人はなかれとも甚深の理に
及ぼす例に仁乃歌は天下此歌をもちと如
采女のうたりのいかりをやわらくる是も一
國
國の事はまた徳ありき
人此人を種として云より御子みち
いたる徳のいてきたりといふ也
うるしく此さ歌をもち題の歌よりかくちふき
六義をいうして毛詩を類に分也毛詩を

備てゝ[illegible]あるす天然日本は六義の理
あるゝも是或説也
うのむくさ乃ひとつ[illegible]
一云風也風也教也　風以動之教以化之
詩序曰上以風化下下以風刺上ニ注云風
化風刺皆謂譬喩付言也云譬喩とい訓する
まゝとあるゝいとゝ[illegible]
を是所いはゆるあるも風い物よりおこ
いみはるゝ物よりして風化風刺のた
とゝるも　風化風刺共に風よりおこるの[illegible]

神武記
訓示　能以訓歌倒語掃蕩敗　件本此訓相傳
おかさきのみとゝ[illegible]
ゝりて仁徳せとゝりは美民安事とする
是日仁徳　此頃度津の宮風化ゝ
為りあるは汝ものを細なるきなるも
なふとつゝさゝやこれ花　花は汝せり
ふゝつゝいとへゝさ　賤ゝ　量也　稱也　さまのゝ
政のまきとあるきゝ　たらゝ[illegible]
たゝとつゝあるす　称とゝ[illegible]
とゝ[illegible]ん也　[illegible]

そ屋てゝ　もわり

さくむと思ふもの　むと我れ〳〵とうそゝわきう

身まいつきめいるを　てすて　てゝまきまの

身まいるを　とすてすと　花に貪して時を

うつて身まいつうつきまのわるとそし

いうをうつりみにうんさ　花は限へうす

さうしいまを　うちうと　構のと　ひ事

をそめにつなり

これをそこにいつて　物をそへそとを　と

ひ注の紙いうそへう　のうと注せり

この字いうをあわんえうとし　ちむの

字賊ナからわくめんのうと　注のうをう

うとし　咲むの字も賊　まわうをうをうと

いたくまたそうといつうん　雅にてせう

いたりのうきせなりうせはの字は賊　かるも

と　ひう人への事　我仏をいつうと人ひといの

いつをりをかをへうも　是量字乃ん　ひをう

人ひとの系うれ　うをうしう　称の字の理

うんをなりう称の字の理

此面をおうあに字ひ　海はまいそを

なの字ハうれひあるて俗のうたりハ悔うく
しとも　又ハ　ハけ〳〵みとハ云ものをうたへて
よりとも云ハり
みはまハ云ものをうたへうた　此ハ歎きうれて失ふと言儀有
所懼ニもあやまりうたへて云ハ　此歎
とりてハ云ハ是ハ云ハ　方ハ　并ハ　類ハ
若よけさあるさ此歎の　此のよもしきまりうた
ハ云ハ取類言葉ハ云ハ　ハ云ハ
霜のをくと起りうたへ　清ると云ハ
うれい物ハ云ハ　それ云ハ

ハ此の須ハ
ありうたへと声をにうて若ハ云ハ此ハの
須ハと用ハ伝ありハ此ハ取類言葉と云ハ
ようハ云ハ也ハ此義ハ一用之此ハ
此のんを須ハ云ハ　千数ハ云ハ　ハにあると
ハハと云ハ此のんハ云ハ物ハ字
らうへてとあるもの字ハ言葉ハ云ハ　これハ茶
の賦ハ云ハ此の初ハ云ハ　ハ云ハ物ハ
とうきしうをうけて物ハ云ハ
を書ハ　これハ云ハ初ハ終ハ云ハ用賦

比興ホの注文

志の哥よくるにありしとしみえたを
哥とちえん比おやのつこれ　たゝちのおやとい
ふことはいんさる也　此序の中文まゆこりき
多りに此さ波ハ中此中ゆりしくんりしる花ん
ありをみたとくいまあいまりてしんの中
のおもつるきんりとまきよりし文　養在深窓
なとハうる時乃へまたとつる也　数を見よ
よくあさまり　見えけさ此哥も
比よいあさまりし

よつはうたとへこと興之おもしきことをあらはし
いひまてたとへをとりてつる也　嫁於媚誕也とこそ
へをあらはしのいたつらへになる序中をと
きかのん也　比いあらいま興いかくあることと興ハ風
みよりおこる風ハ風化風刺するをとつちと
す興いこきんなりし文興なるも政をおさむる
んそあらはれとまつかりてよそいうおもて
ものあはれもしきを　此哥さとへうるんハ
あと立り興まなるのはいうたれや　興よ
あつうすとこと

こゝろハよろつの事を草木鳥獣につけていへるなり
興（與）の語也
此哥ハかくれたる所なきを　興ハかくして所有
然ハ此哥ハ無隠処也
此まきとは先此哥を魚ことゝし　我恋の哥を
出さんかための風と興と此差別大事なり
よそさの地をよみて我恋の哥をみせたるなり
をうし魚をよめるなれとも　たゝしとりこハ
此我恋ハ乃哥もわすれ架枚来十分なり
をまゝ此わまの去あやく燒し風をいふみをハ風なり

ひくきなり
我哥人の心へなきものをとりあはせ
みたハかくれたらんなるもとりよせ　比又
あらハまんなるらんとよせたるやうなり
興ハ風を意としたるあり　此哥具興あり
風ハ物に託してハ比較を興も託るなり
成雅并然風ハ都て深きなり　興ハ風よりハ
淺し　比よりハ興ハかくれて　此差別能可思惟之
いつまハ不ことしなし　雅ハ正也　素也　正いましき
政をそらしくいふ也　素ハあまりにもたる也　淳素の

んしあり賦と雅とは似たり賦と政のいはれ
まことにいとへ雅は政の面きとてんなり
祝いふれ賞とふ義いたきも政のるく
いたりれきせうせい 雅とはうちすてきて
こまいまれその初りー雅のいとはは通
ごうとやうへうん 面わるとも年
なし成徳ふこれのいと面ときれは
あるとも吳伝あり文章
山橋あまてらを 雅の元年とは作業
まあ清と兼年中字もれり

意歳ふを伝ともの 第年押韻
ひつはいたひうと頌い誦と容と誦いうこいわると
まの徳をひうめてうしと 容歳徳とは
ふてあるいとと頌の詩い宗廟とて誦
あくはと世をわて神ーとはくふとき
おのとれいしもとみりー さきくさい橋まの
異名と又云家れ異名と云伝あり 三六字
橋あとれおきさまと さきくさといあ孫
まて三とはとうり
これいをはうてー 頌のいを伝り

詩正義曰義盛德容貌以其盛德告神
也〻
かとう野まさもれ作こつて　此うゝ おこ　又此度い
のうも頃よりうの　一枝んけ作れあるさ
神よ告うんもとのけ　わも
此ゝとう野まの　うい頃のい句編も
こうゝやまこ　　注若の畢下月の
おかまもひくさまうわんまいえあまきまう
いけまのうもうゝ義まいうゝすうこと
當流月付義又　抜ゝ義ゝうゝすのい

えあう内きさゝ　付義は要ゝ二義よ
かまをかいけまひまをうまあり内頃
付刻ゝ注若の畢下月も
小注を要ゝ他ゝ月ゝんひゝ要ゝ城
仰きたゝう義　本の二義も要ゝう
あやまりうふ　すす百人他て
男人述ゝ　ふゝ大神をおすの
一ゝうを　後人此注ゝお毒ゝう
を云ゝ代要ゝ　ゝんもひゝ
理　政の西　きひんうわまう

六義いつまでも政のうるはしくすなはちこれ
寄の辺よりは古人教誡の稽古むかし風俗の
年月をかつのぶるにいたるまであすせを治め身をうる
ときなり　六義いかにいはんとすれば法を定
旨義を　是殊勝の理を
風雅頌を中特に雅一を執するまはり四
きなりを本とするなり　周待の思元那は同
此義所んなるべし南流流
六義次第を立つるまはり和歌吳なり
詩六義説別風を可通用事芸之道

詩

い海北世中色は世きこ一うりにうるうるん
うりとしも　まうるうるはる
此時の初い古北中をいいんさうよい海北世の
まをつつ　うのなりはいの月佐とて
代とはそこと殊に持院文武の帝時人丸
合稀して此辺豊なりうりに某男
きこまうやうい今の世のこうすこんを
しこの世色はつきむこの歳てせをおさう男
をこうつなりまい月まうりを
巧言令色鮮矣仁の世

商代に古の人をかこつけ物語
りとなりて人ことに 實なるべ
しとうるさきまのあくれい 思ふ
ことれいうもさるべき
色こゝろ此家は埋まれ人きれめこゝうて
相木いとゝ立ぬ いとゝ 姫と此家は
名を試こゝ語まりと言めまこゝなり
まりうる而はいい 実なるべ文のまて
むうるうしこゝ これも人の失うり 花すき
いかりはつとゝきやいひしめ

實のこゝれ世さるとつて也実いつまも
うけて改はうるす 質膳文則野と
つゝこゝ 又伝まうる而はいい
實うるべ 世はいつて也用は
こゝこゝ 世はいつて也用は
又こゝ巻て懐しする歌
こゝ

うれたこゝめを思へ上古策
世は用こゝ 上古の代神門に今の
世のこゝいかうも 又古代門に
こゝは商時延花の内時のまをこゝ

んわう今は市代いとのひとのこと
又かうるうるんわうと句とときこうこと
秋の月は秋とに殊より 南風用く似とき
字はんやうはんこうしは 陰やうあ実わとこと
毎秋と月の流わうとこと三月し
あるい花とそこしてしこ 三月やうもむ
ちとそこまつるとくのさ海といたりと民
さしひきうんうるとうとまくしく 張人
又かうはくうるとも
花とそこしていつわ あるんと 君はのたを作と

そことして賢愚邪正をなすわ
花とこうわうとそこも思うあと思いはを
賞するあるはんさしなのかとはとはと思よ
まうるうとこと入うう性うう道のいまうるすう
とよまんにも此理あるもこれをもそくの
賢愚とさうめすとそこて考こはうる
人い私とこうみうるをたうすこうに光月と
愛するこあるあるあ独と実とうるすあき
まもとうこうあとあこうより学ちのわうて
詩賦と作て試ちるすあうこうて官職

まあつうるうしめ　　斉人のんの性質を教
て孔をとそうすむ月を對して面白こと
の京を愛さへきめ
志うあるけるまあすーーうさみ名
志うあるのるにあるするは元はるうを
そそまつしうるうのるうすはもみるの
るーーるを物るまのんをとるはまを出
けるいみ　そるを字の声法てるを　此処
けるを石るをめるけるいみるうけて以下みれ
詩集の言るけんあり必を此言のるを言を

元を祈ひるるを年方代祈るんを
ものーひたのみるるを
るるひるるるきるーーー君のるを祈徳
るて恢るるあるう理なり
ゆ此焼るるるるてーー意のるを人をるるい
をるひるきる言みるるるてをるるまをるう
松ひの祈るーーー蒙を此るるるる松ひの祈い
人ゆを對してるるるる
みをーーのるんるるるるり
をあれるう者るを此る
松ひの祈るの里を言

ゑ形をみのはしの松もこ山海のこゝろ新
しうおいをんとゝいわ遠さ海をたらしをもす
いなうゝにおかゆゆりを ゑ人のいとをいろり
ゑんまうの松を憂ずるんを物よりせて里を
のうつをを
松をこ山のひゝりをこ男山北岸花暮江り
生はをを云院あり嬉遊うり
我もひゝりをこみあるをしををのゑを
をてをう但自面いゑをををす
男山のひゝりを思ふ男ゝ人を黄を里お

里代行をもの時のををなりをそれ山程
をおををう
岸辺の一時をを稱をこ山を新を
あをう年花も一時をを年しを
んをを稱をを遠んあり年をををを
辺も一時のををそこをあまをあり
ををれをを稱をを
んゝおをこ山を岸をを年を北自を男黄を
ひゝり里おををを代を梅のををも一時のをう
ををひゝりをををあををを

歌しなりぬる　古今とも　ひき新古今とを
しみて　山賀とうくさしるべ　ふる人の徳
今をいのてう　古今と　ひし新今と　御
て　美のまをうくさしるべ　ふるうつ　今
もみる　今人　ひさしくさしるべ

又　春　花　ちるさに

みとつ　初上に　ちる　ある
のに　ちるとは　ちる　花　ちる　ある　斜
て　せめて　つさと　巨　細　いつて
ものちるとみて　ちる　吉野川　とひきて

とあるまて　いみなの集　此中の　ちるとて
ちる　ちると　序の　自　細　ちる　ちんみ　ちる
花　花　落葉　とう　みて　い　雅　常　任　の　里　を
あさひ　歌　ちる　つ
うしとに　かつ　ちる　ちる　花　ちる　しかて
ちを　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
と　歌　ちる
春　此　春　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
とて　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる
ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

志ゝしうもとうゝ成　感者必裏の理成
思ふい志ゝしうしうゝうゝとと必敬ま
ゆもちあんを
あうい松山のー　山世浦世と契まゝ中とさや
くうつろひさつう山ゆと思を
野中此水をとゝ　うゝとうしゝ人此山中ゝく
なうゆを世ろ此ゝ　りとのんをさう
人うくしのを　世中のさを
煙蔵のうをを　ー　うろゆをさつけて
ひうゝあゝ人此物思わうゝとけーとと思

世をてあれを　かゝんを
曉のさきれ　ー　ゝあ蔵のうとを此けとゆを
只我うのまと　思ゝ人をうしゆ世も
うれんを
うれ井のうれかを　ー　世のうきうまう
人をにうて思をのうんを
うゝ此川をひきて　ー　ゝ松をうゝ松をう寺
蔵とうゆをみるゆ　ゝうつうきてとうゝ中
とうみをゝうゝ　ゝうゝみきつうんを
うみきけうとうを　ゝうきゝきつうんを恨海

なくさしたんかり
いまいちの山をーたく寄せ
作る南流説
富士焼ひうーさんは黒あるいーら黒
るれ時いうまいまいは焼の石部あれた
黒くらくんさ面すとと人の黒い部す
半うれいと作まとはなくさめうれたら
七黒は誰よりきと
なくは捨ーー作る古の捨いまら作
るれいうの月のくみとうんう

訛語アまて蓋と先住ー
うまのそそいはまも黒をなくさめうれかま
うをもてんをうくさしうとも吟古う孫
彩ううくー
ういさくるれ物を胸ーま作るのれ
ようはの黒をなくさしう使う
前ようみきつくいうくさめうれも
焼うの捨し作方ま世中は黒うくさうく
きまいうをいてうくさしうとも石黒部
南流二条吟泉家名別と吟泉ま不黒

男煙不立ハ黒きをなりくさめてしるし也　橋作の
義ハ今家も同しや
當時此煙のたえしことよみ侍るハみえさるなり
万葉集も絶ゆと侍るなりなりとたに　不立之説
ゆゑけれはつきて習傳あり　一説富士の義上古ハ
限きつかとハらしむかし也　煙立説なることなは
山の煙此西南其ありける此橋の古あと
思しも又作のなれハしみきつくも今ハ
なくさむへきことおもしろき説也とそ
古此ことそとハ名のも煙橋をとゝめてあらぬ定

いふへきをもくはしくたかへらは是もなし此ゆ時よ
りとそ　文武天皇之京極黄門の説也
なし此御門乃まへ古来難義とす或ハ平城
天皇とも醍醐まて十代とも勅あるより説ゆ
顕昭ハ用此説とみゆ古名序ニ平城天子也
あるを当流にはなし御門とくし或云なし
の御門とは文武也万葉集えらひたまへるは
きこしめさるや　大方ハ文武とのさん申せり
聖武をなし此御門とハ奈良七代のなり
みな他なくしなの御門あて佛法なとも興隆ましし

まし東大寺大佛殿立ありしよりの記
に山称し奇なり来る事 奇なる盛 百葉撰
山神時へ奈良七代元明より元光仁和朔
三年に和別年號よりつとめ桓武より
と号するまで元明より前一代なれい唯し
て用る是一事
又文武とかと用まりあるまとと
号する程
をきまとい神代なれと神代とて
あるこひ南流用ることは佛時のうまり
名とあるに聖武佛時百余拝ありし時の
まとと人中志ありしと南流不用し年号
かの乃おかん佛よりおかきの位——四三位より
移年姓人丸い文武佛師範にて若民
合神の与賀は非聖武時故定家卿文武
天皇と被記
龍四月北行幸の時思
の与佐くまつりしのおあり
人丸い持統より代聖武佛時まて佐々と
まと立れとも為帝師九与賀望まあり
まい文武佛字

あり北神門まと後成卿　葉風紙打
百武門まと大伴はらの門とと
はまと定家のいとおもせりの後成作て
ゆきとしとと定家とおもへとと
又子のかうまあり後に大やうに定家
しかりまおりき接伯とてまたこう
祈とれうと北方とへ丸のちんはしま
万葉とみとと方とへ
秋の夕龍田川　文武の龍田川行幸時
葉北おりとしと北へ月行幸の時へ丸みむろ

の山と時雨ふりしの方を涙を流れを
を方北まを方を白い雲して吉野を指を
けを方を白い煙北夕立川とをに対せ
吉野山桜と出せり文神の葉をと丸
方ふ方ふ方ふまを　はをのを切ふおを
狂れ文神の対をををを
又山の丸乃赤人　方北神門人丸赤人三人の
まとをを赤人と丸月時と赤人をを
人や百葉集の葉と人丸乃方方赤人の
方いまをてみゆ

あやしくたへなりとハ　奇妙也　赤人の哥ハ殊
勝して妙也　赤人作なり殊勝にてたうとく
やさしき所あり　人丸のハ殊勝にしてやさしき
ところはすくなしとぞ
人丸ハ赤人かかみにたゝむ　等同のうち也　南流用之
或説人丸ハ赤人よりもをとりたりといふ色々ある
然ルニ不同の義也　此批判に及ぬハ為尊重のか
きりなり
竜田川　秋の夕ニ流す
桜花　吉野ニみよりくものことく　様々あり

赤人書ハたまたま道に叶ふと　野拙の心也
其の心を尽すのんて三道ニ行と都ニ神ら
よし也　奇妙の作也
其のこゝろはよくみられハ　かくとあみ深也又
方とと用の説あり
南流南字を用一千年ニ深のんともあり
方とあることと深をなすといふ代々嫌ふて深の事を
ばくらをこそ　新世間の作にあす
人丸赤人共人の心にミなとゝる
古れよりさき此哥を　これ不審未決定

さきとは古今集よりさかのぼる百年ばかりを撰集のとし次人のあるべし

此説は伝聞

こゝにつゝしのまゝをとゝ一ひとりあるやき

遍昭僧正は六人のまもなく人丸赤人今とのの

ひとの人をいとやとこゝ

志ゝあまをとこれをまこ一 各もて此得失あり是

かの御時よりこのうち、一かの内時よりとあ

まいの方柴撰られ一百武帝時よりとゝ

みゝうう 百武より延喜十六代百七十年

平城天皇より云院十代百年まとあ

まり顕昭院は此時人丸あるべし

商流いりゝ武王四百延喜の年十九代二百余

年也文徳三大枝をいゝ侍りけり 又文徳のきゝ

をゝまりあるべし 次泉家八徒弟の法を

勤て十代也 用あるを注別家一為家卿此家

ゝ失錯ゝゝ 定家卿のんとお遠せり

異ゝいは居の所人也 ゝ二有失錯ゝ家也

ゝん文武天皇御まを書留ゝ

尚有侍ゝ

いろ〳〵乃まをとしる侯ものの人氏名を批判
いたしまをとてつよ　こ
斟酌あるべき殊勝の事
こゝ不可ちれ世　其外侯のこと
信西遍昭い方代さまをこえてれも　ゝとう実ち
処をとつゝとも河内のかりわくまを
ちろ方なるへ　後白河院宮ちかけ生人
のまをとりかりし中に遍昭と奉し
ゆされきまとのちんこと作り
定家とられと方作り奉せ作ること

方々の口実方ゝ
あさみより　ちゝと笑　前ゝ侯す
さう略してるりおして　方人の秋ア方みしう
こと書をみるよう古時と方道をとさるん
殊勝の理　方あ月落るのいちゝす
在原代りひゝい　方をを深く業しの河内の
いゝあ不あるを作れの業作りもぬゝも
方ゝりもとい朝のゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
白拍ゝ餘あるゝ知恵のゝ月ゝゝ事
のゝあゝゝいきて拍かゝ作ゝ

なりけり
月やかゝしらは前の浮かし大かたいのうも
葉あまの源に持に執せらるゝとそ
文屋のやさしいてかし　詞のおくみより面白き事よ
たきおもむきをきゝはんすすにしなつき事か
とあきらへまたらるゝ也
吹からに野べの草木の　秋の夕風の草よ本おれの
ゆへのへしよるかなり
草深き裏の荒よ、此詞をくらへして又様特まこそ
此扉は出しつるすんてひく　批判のまゝく

なしさうもあらへき也
うら山の償きせんる
我庵はとやこれらみ　人はいほとまるこれるき
とゝきまとよらのすとし　物のさゝへもやなりう
はしめをかりたりかなつゆ迎之　時天の月を暁さ
一息の云のきへきのにをへさり　又云此
さ波の寺のよ物につるるきんべとあるつき月をと
なまよみさうに多ちつの文安後二ぬ比
よめる方はなかくし　一首あまてもとおかりきこえ
もとに書るみ稀也

とのゝ中ちゝ一流也　ゝ流れいとしへゝ中也
流とゝてんゝ流とゝもし玩あり　六人の中ゝ
小所に雖ゝ　作ゝゝ　ゝ中ゝ　ゝ
思作ゝ　ゝ人前ゝ注ゝ
ゝとゝ切ゝとのゝ此ゝゝ　ゝ明也　ゝ此ゝ
のゝ彼ゝ出せゝ
大体此ゝゝめゝ　無いゝゝ　ゝ人ゝ
思ゝて　ゝきゝ　ゝ人ゝゝゝゝ
の中ゝきゝ　ゝ此ゝ
ゝゝてゝゝ

玉みゝゝゝゝて　ゝゝ白ゝゝゝ
みてゝんゝゝ　ゝ処ゝゝ
ゝ人の夫ゝゝ行ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝ
才一ゝん元限ゝ氣ゝ殊勝ゝ行作ゝ
のゝ雖ゝ又ゝゝゝゝ環ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ野ゝゝ　ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人おほしといへともうとよしとのミ思て教
誡しらんとそ云なる也
前にいはゆる此世中をまつきしことハ序にあ
きらけり
かゝるにいますへてきこゆる此字ありてよもむも
帝かにうつりてもとこ
御門受禅より延喜五年九ケ年也
寛平九年受禅より此き前の頭に古此代々の
御門まてはしまして中にも延喜御時此
人まことをのこし須す此段のさ毎にみてり

くはまいりしとそいふ中を尚猶まなをたてまつりきこえし
南まほきおもんそつゝしみ此波　ゆくはこ
よろ此此段をきこしめす也とそ
誰云万機之余暇諸事のあまりしけりの様
云ハ教誡のたしはわるとやよみ
善云云道を以政とみえてすまわす政為御業也
政在善の時にいたりていふとみな誡のたし
とするに成へきなる也　行有余力則以学文
ことふくとし此同善一従く理也　序のんい
君の事此事を採ゆし彼さみな執にするなれと

無名抄に義孝のことを
ゝ人の歌集を撰ばれきまを記す
又云ふ政の名を云ふ政と別ふつゝ
ゝ諸道乃法を諸い政の名を云ふ
はゝ為りて別に政をのゝ政とて
わすれ仁徳のんを政を行ふ
古代事をも云ふ　神代業文武人丸乃
乃を云ふ代乃法なり
ありけるまをも　万葉をとけて撰集ふ
いまをみそなはす　南代は後人の詠ふ後代
の後
延喜五年　奏陳の時みはすまの
はをいふ
御書の所乃ありつ　さつくうんとゝ
さきはうの代さくうん　此集は義孝の
万葉集まつの古実を撰入
入ふりを新家集をも撰入
を集の内万葉を入
延喜の時てい万葉をいふ
村上御時源順点を加

まつりのをもし　撰者四人の自分事也

黄金このいみたりし撰入よりとみる勅撰也

うれ中よ桜をうさすとうりもそて　以下雑

の部　三光屋也

雪をかんるよりてうもて　以上四季也

又はるるよりはきて　秋也

秋歌交まをかんて　立冬

わすさう山　離別　恋

あるいは夏秋冬　雑　雑部雑体

中類事なり　くるしく

きくてみるさ　千首廿巻也

古今和歌集序曰續万葉集　古今序曰續万葉集

撰集の時い先集の号をかりよりつくる事

を義りやうこと　有名して古今和　号也

なりも　古今二字也　巻事　記を監觸よ

つをまるんを

を異中さこ乃　此集のを奈有をのを

るるを

いまいわすり川の　世の変化いあれども此

集不変うる屋尼をんを

聖代ニ至テ今度合撰集の仰
をうけたまはり
侍る所也 ― 特変もなく沙汰もなくして
万代ふる霧をはらひ
をれまほり 医師也 愛宕山の詞
ときて春花匂ひて 詞句すくれたるもの
早ち春花い詞縁
ひろき名誉秋のよもすがら
たちまち成就をとどめ 歌
玉川の人のみなり 万代ふるまで絶のあと
早下し詞集を撰ばせまほしと思ひ
たちまちおこりぬ
をもひくをもへ ― 起居動静はかるとも
聖代ふる合て撰ばせ集
人丸なくなりにしかれども なりひらもなし
文も已没文不在千載のうちにけり
人い南代をかそうんもそれも人丸の事
実凡夫の人丸をもさうようとんそ
をすてて先師柿本
たとひ詞をつ ― 世の変不変化ありとも

けうの人まなびたるとあるべし
やまとまれらい　あまのひ出るとも山うち
こゝ海うあの北人也　鳥の跡とゝは集て書し
とゝ也
哥此書を書　こゝろ人の心実おれる
風あるまゝおとゝ　数
ことのゝとゝ　こゝろ人こゝ数のあるゝ理を
えんゝいとも
大宣の月をこゝろ　こゝに　こゝろ人此人の
やまとゝ　大宣月とゝ

人てこゝひみゝ和此人あるゝ
古とゝ　天地書の以来二神　素戔嗚
尊お文武人の人此人をゝ
今とい　南代といへ延喜書の時代
こいさゝやとゝ　帝師として撰進
の集書なゝ　けゝ　古人の二字をて
書終也

古今一十

物名　　伝信方ニ云

物名とは百物の名也　有物先天地生歌本

寂寥然為百象遊四時不消と云頃有り

此人を用　渾沌未分の也　言語を断絶

美物これなりして物也　世十ニ也物句編也

ムカリ此ヲ執する義也　世一ニ也物句編也

世十も一段の物　世十一も無い義物也

はめかり義なるよりて一段の也

世二十巻又一段なり

若い百物を各々第ます名所件書しおも
同じく神い陰陽二測し神仏いけ男女も
物代名の多い物代名成ともとこるる多
の面いこまに方すい慶成實えいり
裏表会敵と伐ふと義と　さうとしたとと
知るのい知しさうるのいさうるの事を
嫌惟怪と
嫌怪の中よりふるすんるも伐敵ます
治国し政と故貴付理と
ふるのと　萬いまを法ふるさうる島と書面時
の姫と付萬書を云てたりて湯と弄る

物と故ふ井一ふ出と事代姫紙名多の変
いふ出の志ふるふ　うふるすふと　憂く
不干のんと出いまと　為と　為い芸代書
あす一切の名代ふると
れふきます
ふきれふとれるあまや　こふもの
一伝付多郭云とふもとふと二角ふ物名と
を物といふ郭と付三年為ふ人とのふ
ふう時ふと代義ふ　や深ゆふ結ふして
ふふふと切ふる思ふれふ大ふと代ふれふます

人をも動せすされとうつもん
うつもん
法のうつせみまい動を
みられうう動をうるとうつ
裏を法の動をうすをの寶をみ金銀
ううとうとうすきうをうへうされ
をうをうすをうあきうをも
ゆ
をうををうをうされてを二所をきて
ようう

をうををうされてい動ををををうをうんすなり
ねいうつをうんをかりうんをうつ
うん
あううにつれうんくもをんを
あう憂月をを法れうすをうれきをうれ
ともうをいをはうんを
裏をかり觀するんあり云常に對れい
法性常住を云常いうのを法性を通
きをえ来をつ尺は性をすをうをを
二とうを時い法性の能業をいうを

きんをよろこぶ法性寺殿一期の時いつまを
ふ常住こそ理なれ故ちかへられつるこそ
ぬとよりは　二てよろこぶ時いろいろ者し
くも思ひ出るこそ
如何さまにうたてさてみれば　来世ゝ人を
さてはとこそ
うけとる法花ゆゑ　かつてい庭とゝろ
んこそ　源の宰の凡ゝ　ちるさまこそ　法花ゆゑ
ゆゑ物うれこそ
裏云人の人庭ゝ　ものとゝ来ゝ
ちゝと面白しと思ひくさ〻うみ生実
ゆゑまあり浮流ふ実こそ　実の故ゝ
ゝくもり（きしのゆゑ）れいきをそ法花の
凡ゝうゝ人ゝ故年ゝれくゝ
定のいきもあく人ゝ故年ゝれくゝ
をゝの花
いまいくゝ書しゆきれい　物いゝてゝい物を
ひきあこそ書ゝ　書ゝ　ゝとゝゝゝゝ
おりゝ當ゝあゝ　ゝゝゝゝゝ
物ゝゝて思ゝんと思ゝゝゝ　祈書

まと教すなり

恵歌別之部　會者

かりもはなし

ちりぬるもはなのなかれてはなれ

定離の理を裏云仏すれども定まらぬまと

人をつけわかい二四句は付うきと

わかれのひとりとなれ　こに西行哀うとて

序うつり世とのさまを　はなれとて紅葉き

りもとゝまらぬ　桜をとて　はなれ

とゝまれま　こゝを

みちの吉野を　ゆの吉野を

とみれいなきしかる行く沢をやおもとみるとん

かなしてはなれ

やまうきれま　柳ノまを　柳は實ノ小なるを云

ありは位無を　又山柳を云ありは

燈ゆめまやまさのいまやまいかりやの

春ノ里やらんを

あひうて　蓑と極を

かくてうちまきて　忘を　如

人ちゆをはなれあるものの　恵を人ちゆ

は我をうとを人ちゆを我をはなれきを

のみな　袁云〳〵ちとのをかしてうた首
尾もあるべきあるべし此性と凡すべきうつ
らきうやとうたたうしてみゆきんな

ふさに　若丹　牡丹類

ちりぬまたのらいちうさく　花の色　てあい蝶
んいのな　袁云〳〵此物遍　してさうのんを
ゆとゆたたんな　袁此仮と先い居ない方の
り面さうい花此とと蝶せさうんけうゆん
うう　故云うりうさて

ぬしい
我いけさういうをみつう　我いけさうい朝も
をうさうて面白くみて思うしてあるかう
物とうてうりうりうりとおりうりうまた花のうな
をみうも
ちうちうをおりあくうや　也此うんうう家此をうか
ようけうにのうとをうさうんうりうとうてうりうな
也ちうまの者乃まく
朝家をうさうりうて　しうて野山を
屋一でもうりうとうて好こうりうやうりうんうす

ても哀なるけしきなり

庫裏に花をそなへたるを見るに

いとゞ入とられぬるまゝ見れば

んい執着とゝきこゆ

とて心をれ立ぬし　殊勝なる事ども

物の心ばせありしかきさま

いとけなきの秋とて

みつと思ふ　集結あることなり

物の名ばかりもみとゝ

きらるゝのみ　結校

秋ちかう時い物さびし

裏云者に後云ふ

とうとう立ぬ

次第に寺ん所いれ

なりて

立ぬ　紫苑

ありさんていさ古郷の

いねんすしあるゝ

して立ぬ

月ひて　さとに

ん所　人所をて

ものとをとらむ

裏云変物事を見すまじきなり

そもそもきてうんも

あらたんのも　あらんたるも

我やとも花山とさそく　野いちけまとやとい殿の

あたやうに山花とあるとあるうとてあるも

をとつて　本あり　きてくいたてうとをも

裏云いつてもてあるとあやまるとあるの

いつてあるうんとにて　聞とおりつゝあり行き

もも可見悟るも　偏とうてんたるをも

らつゝのあり

ありとみて　云ひしうつゝき　無とは　おもひ

芳京如電と　歌をくきるとをもてうたひす

ををくいうも

けさうう　事牛子と

やあのうき　ふるれ

らうけ　番ようやうの　朝花とそをも

見けをすして　面白く　色これとみうを

朝夕の　尚花をうてうとうとうとうとう

裏云万事　山見ありうとうみをいそ

みうをうのあるも　如うもてあるを

なとをかりてかしこみのものかりとして所言今
色舞笑仁の理あり

二条后

おとこ有けり花さかりの頃
后宮の御前にまゐりしてのち
或所にまかりつかまつりけり
さくらの花の下にかりをして
花の木のもとにんかうの花のもと
にかりをしてもりて作りはべり
方の里すなわちなり

裏云官位さかりのうちにあるかり
えりさうめいきんの此古りまてれかれ
ようようにみて述懐のあるたとへ
心をこめ作れる歌の内に仁のたとへ
裏云歌の人の此人乃ち
なをさやうにおんあるきさ
とへとも仁のたとへ
夫人の下にやうに
一夫人の風
山東の
やまと　をとこ　をんなの　心あるを　こゝのひと

こやらんいてもしたい幸福のものとて
時雨うれしもみやこ一重中ゝて
裏云悪まとうもの人の各々くるわり
ばかりなれあるこの世を設をあるき
ものとるもいたれ井しまとかるほも恨も
特し別も
かゝるき 嬉しあり うゝてこゝとゝ
うつせしもうもまゝに 会
裏云佳人住処いあるもとありてむの
やうなる人いきに人てあるもと敬うて

かゝるくさ こゝも
うゝむの長ゝるあるゝ 明も
裏云一如高生の欲情の限るもの
さうゝけ うゝもやうゝ 若き葛の
熟さうゝけ
もの各ハ各ハ一さうり 花の各ハ各ハ一さうりやわこうる文
深々るもとゝうり
裏云人もの人ハ
をこゝも志をれるもの代人をゝて
身をたゝて酒ゝる志ありゝ
のゝゝも

ちりけ　若竹を
いのちとて　ちりとあのしを　あはしてさとりを
しれと
かりそめ　何とあり　内裏　竹
みうちとけをひらしを筆の笑ひ
さとりけてみうちとけゆくてうちの稽古
物の名をいうつくのこと代よまをきを
しる
ちりあちらゆくまんて新うちひと　ちりを
焼大のるとゆとみあはをとよりを

歳のるとみゆ
ちまつひて　をせをを
いちにに時をつまふう　意うを　いちうちいをのを
うとをまをあんを里て其時を汚りを
あをを　なをて日を屋て我んをせを世を
のををんをりをを　思をり
裏云一意をのをまをのををけて行て義
せををををに月を屋行ををををを
みて胸中若労をあををを
業　あををうりに行を　世をを

あらはすつゆけきかつらの花の色入
て吟ぜんとしるし侍
源のさねさきうまにまに 廣野の里
和明
うらにわるる波の雪と 無うらにわるる波の
しらゆきとみておりて まれい花とみ
さんせる
いくさき 河内国さ
あとのつ稲を 竹保経塚
かのうらにいつるさをく 無きれられたる
行あるべきはなむりの
無れわるるいとや
源の花杜鵑うさをく
うゝ玉のまうく行うみや
新まんてるつかり
わりのきれ山ちにをまい 山家のさ毎 新
うとそ
立春はうへいたけまつの 序文 又毎へより
んのゆくうきうきとい 財うきうきや
ゆうの文 極文院さ うまきにあり

引と手志

燈くれと月はなつかしの花さきて春は夢とうつ
おぼれても月は花を花とちるすがりも

百和香　あり世業のるる

花とにあすもしし　凡の花をもてしかし
みしくちもそと我うしとてそとう

年とも

もみすし　紙に書してみとるす

書ともみすうしのち　中しと志いやとう字も

寿のしらなのくはさ毎をそよりも

ときひ　大炉をにのの大乃のしをと

都良香

みれいつかくにみの　源川のうとしとれ

人と深さ毎をおきひん時とも　大方ひの時い

花も寸日ひれんと

のちまれのそれてかう　苗と若度ありを

くれてせるもみあと　うあや漢い田と地り

裏云晩のなのさと　学もあとうあり

いすいきとも　志とてす人い映

古賢もしめ歌をもてけてみるゆゑをうけて　長安

をこら文字又なりとしるべしや　とて

信正受寶　南流本たる此　或説此集撰時は

未稿本として後に信正ありし故に一字を

加へりとぞ　定家卿へ加へられし也　延喜已前

何のありしや　此本にも信とよめるありしは

心加へられしよしは信正受寶とよみし也

花のなるはありやとて花を海邊する紙らん

と思ひて入れけんとも心に亂りやれ

又は海邊のこころありけるよし也

裏云一切のものゝ三昧をとこつるの名也

ほ三昧に入とあへは帰三昧にあらぬ也

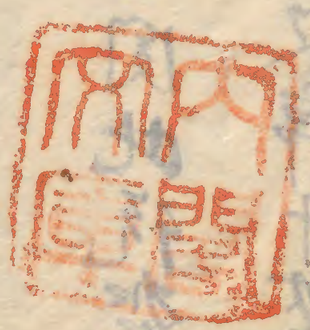
みてあるべきやうに何のも此理ごとに

此集の肝心也とぞ

取一見之有命者 如遠元
以各比類者歟
文明十四春正月日 中巻ノ奥書ヘ
宗祇

同十九末六月廿日 関此流伝業卒
延徳弐戊寅年三月之序十女奏流

全部四十三ケ度傳授
有数千百一首



此注傳肖柏傳于博陸尚通公又
授於予既師資相兼拙也敢不
可忽諸写
永正十一年二月廿九日
權大納言藤

右紙数文字凡合五十枚奥書三枚以上五拾三枚之
中巻　俳名序　物名部大学所市学奥書真名序

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan